アフリカ
×
日本
×
世界

アフリカx日本x世界

暴力を平和に変える空間

報告書

Space for Transforming Violence into Peace

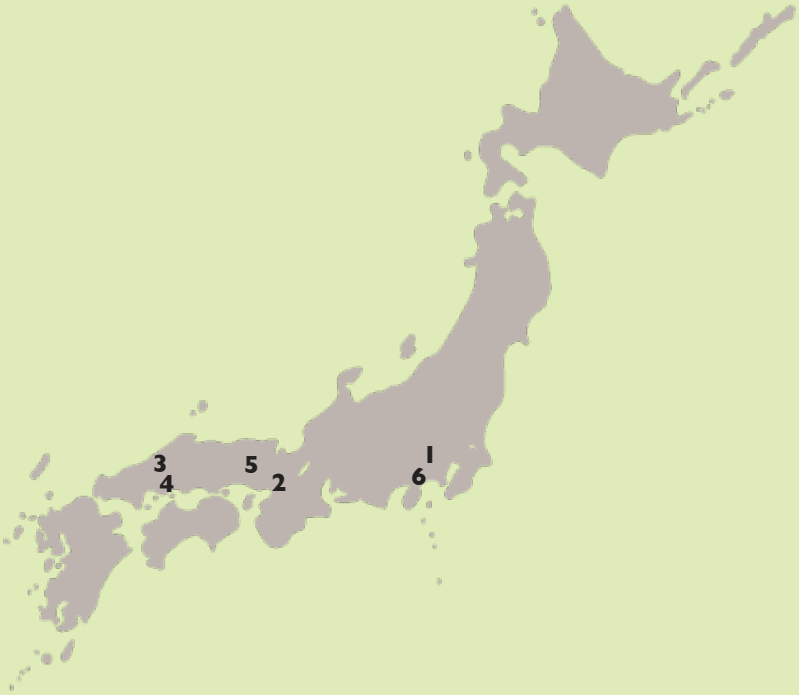
AFRICA × JAPAN × WORLD

目次

1. 事業概要.....2
2. 実施日程・場所.....2
3. 主催 助成 後援 協力機関 2
4. 活動詳細・評価.....4
4 -1.活動詳細.....4
東京.....5
京都.....5
石見銀山.....6
広島.....7
篠山.....8
横浜.....9
4 -2. 評価.....11
5. 広報活動.....12
6. 収支報告.....14

2010年10月31日（日）～11月15日（月）

1: 11月1日（月）～2日（火）東京
2: 11月3日（水）～5日（金）京都
3: 11月6日（土）～8日（月）石見銀山
4: 11月9日（火）広島
5: 11月10日（水）～12日（金）篠山
6: 11月13日（土）～14日（日）横浜



1.事業概要

このプロジェクトは、アフリカと日本の多様な層の知的リーダー（研究者・文化人・職人・アーティスト）が出会い、各種ワークショップを重ねることで、「暴力の空間」を「平和の空間」に変えるために何ができるか話し合い、実践を試みることにある。その際の「暴力の空間」とは、紛争に直面するアフリカだけを指すのではなく、現代日本社会の内部にも存在する「暴力の空間」も対象とする。まずは、同時代を生きるアフリカ、日本、世界の知的リーダーたちが集い、一緒になって考え、語り合い、コンセンサスをつくっていくことで、それぞれが、あるいは世界が抱える「暴力の空間」を再発見する。そのうえで、「新しい平和の空間」づくりを通して平和を構築するためにできる第一歩を協働する事として企画された。

2.実施日程 場所 各地域の訪問の意図は次のとおりである。(日程・場所は前ページ参照)

1.東京では、本事業での「暴力の空間」「平和の空間」の定義を形成するとともに、アフリカにおける現状について学ぶ。

2.京都では、日本の「伝統的な平和の空間づくり」について学ぶとともに、「伝統的な平和の空間」が現在の京都にどの程度活かされているのかも含め、調べ、体感する。

3.石見銀山（島根）では、「空間」を一軒一軒の家や寺などの建造物に限らず、地域社会全体に適応して考察を行う。この前提にれは、アフリカ社会において「空間」の領域が大きいことがも前提にある。現代アフリカにおける「最悪の暴力空間」は戦闘地であるが、現在進行形の紛争のほとんどが天然資源の争いを要因の一つとする。一方の石見銀山は、戦国時代から江戸時代にかけて銀を目当てに20万人が暮らした「シルバーラッシュ」の地でもある。そのため、毛利や豊臣、徳川をはじめとする戦国武将が、その領有権をめぐって争奪戦を繰り広げた歴史を有している。しかし、時が経過し、資源も枯渇して衰退したが、「復古創新」をコンセプトに、積極的な意味での「平和の空間」へと変貌を遂げている。「資源搾取と戦乱の地（暴力の空間）」から「内発的発展の地（平和の空間）」へと転換を遂げ、UNESCOの世界遺産にも登録された石見銀山から、参加者は「新しい平和の空間」への手がかりを得る。

4.広島では、原爆ドーム、宮島と世界遺産の道を辿る。歴史から得た「暴力の空間」と「平和の空間」を、この地の研究者・原爆体験者から考察し、「新しい平和の空間」のイメージを共有する。

5.篠山（兵庫）でには、アフリカ人のアーティストやアフリカ文化関係者がコミュニティを形成しており、地域社会の中でアフリカ理解を進めようとしている。同地において、ここまでの研究成果をふり返る機会を設け、「暴力の空間」と「平和の空間」の定義を再構築し「新しい平和の空間」のイメージを参加者それぞれが、地域住民とも共有する。これを横浜への準備とする。

6.横浜では、「新しい平和の空間」のイメージを具現化するための実践ワークショップを開催する。その際には、昨年のTICAD　IVの開催でアフリカに関心を持った横浜市民にも参加してもらう。最後に、同会場にてシンポジウムを開催し、一連のワークショップの成果を広く共有し、社会に還元する。

3.主催 助成 後援 協力機関

主催：金沢工業大学 未来デザイン研究所
助成：独立行政法人 国際交流基金
後援：横浜市　篠山市
協力：株式会社庵　株式会社石見銀山生活文化研究所　株式会社他郷阿部家　徳正寺　一般社団法人ノオト
BankART 1929　東京外国語大学大学院コミュニケーション・通訳専修コース

プロジェクトメンバー：

ジョゼ・フォルジャズ　(Jose Forjaz)（建築家/エドアルド・モンドラーネ国立大学建築学科前学科長）
アフリカ・モザンビークの独立以来、同国の文化事業や建築学や都市計画の発展を長年にわたりリードしてきた建築家である。また、日本文化に造詣が深く、谷崎潤一郎『陰影礼賛』のポルトガル語訳本出版する一方、同氏の設計した建物が北九州市にある。本事業の基本コンセプトである「暴力の空間」「平和の空間」は、同氏とのやり取りによって生まれ、構築されてきた。アフリカと日本の空間デザインの両方を知る専門家として、本事業において重要な役割を果たした。

ムビータ・ムビータ (Mubita Mubita)　（家職人/ザンビア共和国ロジ王国指定）
同氏は、地元の伝統素材を活かして、ロジ王室関係の住宅から儀礼の小屋、商業施設であるロッジなど、多様な建築物を造ってきた。その多くは、日本の伝統的な家づくりに共通する点も多く、今回アフリカから日本、日本からアフリカが学ぶという視点において、不可欠な役割を担った。

アズビー・ブラウン　（建築家/金沢工業大学未来デザイン研究所所長）
建築学やコミュニケーション学に通じる一方、「空間」について多くの著書がある。『スモール・スペース』『ベリー・スモール・ハウス』『江戸に学ぶエコ生活術』等。そこで取り上げられる空間とは、長期にわたる研究の成果である文化や伝統、歴史や生活と密接に結びついたものであり、本事業で重要な役割を担った。金沢工業大学准教授とし、2003年に「創造性」をテーマとした、未来デザイン研究所を開設し、以来所長として幅広い分野で活動する。

竹下都　(キュレーター/金沢工業大学未来デザイン研究所研究員）
2003年の第3回TICAD（アフリカ開発会議）にあわせて組織された「アフリカ年」の実行委員の一人として、アフリカ美術の日本での紹介に尽力した。アフリカ美術に造詣が深く、90年代よりアフリカの美術展の企画に携わる。今回は日本とアフリカの文化交流での役割を担った。未来デザイン研究所の、開設以来の研究員である。

舩田クラーセンさやか　（東京外国語大学大学院准教授）
本事業の初発のきっかけは、2008年に横浜で開催されたTICAD　IVで、アフリカと日本の文化交流を通じて、日本における新しいアフリカ像の創造を模索したことによる。その発案者が同氏である。専門分野である学際的研究「アフリカにおける紛争と平和構築」に加え、東南部アフリカに於ける長年の現地調査を本事業ではフルに生かし、中心的な役割を担った。

米川正子　**（宇都宮大学特任准教授）**
アフリカ平和構築の実務面の専門家であり、16年近くアフリカでの平和活動や難民支援にたずさわってきた元国連高等難民弁務官事務所（UNHCR）職員であり、独立行政法人国際協力事業団（JICA）平和構築の専門家も務めた。同氏は、史上最悪といわれるほどの人道危機が現在でも継続するアフリカ・コンゴ民主共和国の東部ゴマUNHCR事務所の所長として活動してきた。現在は、コンゴ東部紛争の平和構築に対して日本ができることは何かをテーマに、宇都宮大学・特任准教授を務める傍ら、同紛争についての著書の執筆や講演、JICAの非常勤アドバイザーを務めている。本事業では、アフリカの現場における紛争と平和構築の実態を伝える役割を担うとともに、日本独自のアプローチによるアフリカの平和構築の提案に重要な役割を果たした。

西村浩一　**（毎日新聞編集委員）**
毎日新聞大阪本社や松江支局において、長年にわたり社会面・文化面・生活面の第一線記者として活躍してきた。近年は、毎日文化センター広島の館長を務め、関西および中国地域一帯の芸術・文化に造詣が深く、地域に密着した幅広いネットワークを有する。本事業で訪問する、石見銀山及び篠山の関係機関は、同氏の紹介によるものであり、同氏の参加によって本事業は、地域社会に根ざしたものとすることができた。本事業では、地域社会との関係構築と成果の社会への還元、発信において重要な役割を果たした。

4. 活動詳細・評価

4-1. 活動詳細

プロジェクトの背景としては、2008年の、TICAD IVや北海道洞爺湖サミット開催を通じ、日本でもアフリカが注目される機会がもたらされたことが挙げられる。これらの国際会議を通じて、政府間あるいはNGO間の交流は深まったが、それ以外の交流は進展していると言い難い状況にある。研究者間の交流も、文部科学省の科学研究費等を活用した調査研究活動を通じて、年々深められているとはいえ、学術分野以外でのアフリカ・日本間の知的交流は不十分なままである。日本でアフリカに関わる人は、政府関係者、援助関係者、学術関係者に限られ、交流の輪はなかなか一般に広がらない。そのことが結果として、日本の一般社会におけるアフリカ理解を一面的なもの（貧困・飢餓・紛争・感染症・野生動物・人種）に偏らせてきた。本事業は、このような偏りを乗り越えることを目的として実施され、各地での豊かな交流は大きな成果を得ること事となった。

プロジェクトの意義として、次の三点に集約する事ができる。第一に、従来アフリカに関わってこなかった層の人々の参加を得て、アフリカ・日本間知的交流の幅を広げる点こと。第二に、「日本がアフリカに何かを教える」という一方通行になりがちなコミュニケーションのあり方を乗り越える点。第三に、「暴力と平和の空間」について新しい考えがつくり出され、「新しい平和の空間」のモデルが提案される点にある。本プロジェクトではこれらの点が十分討議・検討され意義有る事業となった。

また、従来のアフリカ・日本の関係は、「支援される側」「支援する側」という垂直関係が占める割合が大きく、アフリカを客体化する傾向が強かった。したがって、「アフリカx日本の平和構築」というテーマを掲げるのであれば、「日本がアフリカの平和構築に何ができるか」という問いを中心とした事業になる。しかしながら、アフリカには、我々日本に暮らすの我々人間が思ってもみなかったような発想や経験、文化が豊富にあり、我々自身がそこから学ぶべき点も多い。本事業に於いて、「平和構築と文化」をテーマに、日本がアフリカから学び、アフリカが日本から学び、アフリカと日本が出会うことで生まれるダイナミズムを創造していく事が出来たこと事も重要な成果となった。

2010年11月1日から11月15日までの各地での視察調査・研究会や交流会は、当初の計画に変更なく遂行された。
活動報告をここに記す。

東京　11月1日（月）～2日（火）
「平和の空間」と「暴力の空間」を定義する。
Identifying “Spaces of Peace” and “Spaces of Violence”

東京でのワークショップは、まずプロジェクトメンバー間の議論を深めることを目的にスタートした。東京外国語大学の学生を交えて開かれた討議には、都市における「平和と暴力の空間」への活発な発言がなされた。

10月31日　（日）　招聘者の来日

11月1日　（月）　東京外国語大学にてミーティング後、公開講座「アフリカ紛争・平和論」にて、ジョゼ・フォルジャズ、ムビータ・ムビータ、マリア・マルガリーダ・シャヴェスによる「アフリカの平和と紛争」についてのプレゼンテーションを行う（70名参加）。

11月2日（火）午前中に根津美術館を含む、青山周辺の建築視察。その後、未来デザイン研究所にてミーティング
ワークショップ：
場所：東京外国語大学本郷サテライト
15時半～17時半
参加者：ジョゼ・フォルジャズ、ムビータ・ムビータ、マリア・マルガリーダ・シャヴェス、アズビー・ブラウン、竹下都、米川正子、舩田クラーセンさやか、小野珠代＋東京外国語大学アフリカゼミ3・4年生（15名）

京都　11月3日（水）～5日（金）
日本の伝統空間で暴力と平和を感じる
Sensing Violence and Peace in Traditional Japanese Spaces

東京から移動し、4日（木）の午前中は朝、京町家再生研究会の創設者で建築家木下龍一氏による町並みガイドを受けながら視察を行った。木下氏が再生中の京町家や、町家を再生したレストランもあわせて訪問し、木や土、竹や石を素材にした完成度の高い技術と、伝統を現代に蘇らせる知恵を学ぶ。その後、東京大学教授で世界的にも有名な藤森照信氏の作った茶室のある徳正寺に移動し、秋野等住職によるお茶会に参加した。お寺の本堂でのワークシップでは、木下氏とサコ氏のスライド・レクチャーが催され、京町家の歴史や現在、アフリカ・マリと京都の領域に関する類似や比較などのプレゼンテーションが行われ、その後の交流会に於いても「暴力と平和」について京都ならではの意見交換がなされた。

11月3日（水）東京から移動

11月4日（木）
場所：釜座町・京町家・徳正寺

10時：木下龍一氏と町並みツアーと町家再生プロジェクトサイトの視察（釜座町）
12時半：Alto Rettanto訪問（木下氏が再生した町家レストラン）

15時半～17時半：お茶会、ワークショップ（徳正寺）

「日本の伝統文化における『暴力の空間/平和の空間』～京町家の歴史と現況から」
（木下龍一氏、一級建築士事務所アトリエRYO/京町家再生研究会理事）

「アフリカの伝統文化における『暴力の空間/平和の空間』～日本の伝統文化との
　比較の視点から」（サコ・ウスビSacko Oussouby（京都精華大学）

18時～：交流ワークショップ（徳正寺）

11月5日（金）
場所：庵　京都市内

午前：庵の伝統文化研修プログラム（Origins）の伝統的なお茶会に参加
午後：京都御所・龍安寺視察

石見銀山　11月6日（土）～8日（月）
「資源の呪い」を恵みに変容させる
Transforming the "Resource Curse" into a Blessing

世界遺産に指定された石見銀山では、繁栄時の人口は20万人、現在は400人となった大森町に滞在。受け入れ先は、石見銀山生活文化研究所・群言堂の主宰者、松場大吉・登美の両氏。彼らが10年間をかけて修復した他郷阿部家（200年以上前の代官屋敷）に宿泊し、文化財でもあるこの家の建物と生活の再生を学び、また町並みや石見銀山を視察した。ワークショップでは、資源が紛争のタネになっているアフリカでどのような内発的発展が可能かを、プロジェクトメンバーと住民と一緒に考察。また東京外国語大学のアフリカゼミ有志10名も参加してのワークショップでは、学生によるプレゼンテーションの他、ケニアのスラムの子どもたちが作曲作詞した歌と踊りが披露された。日本は平和というけれど、3万人を越える自殺者の存在はどう説明されるのか、貧困に喘ぐアフリカのスラム住民が何故笑顔を絶やさないで暮らしているのか、といった問題提起がなされた。

11月6日（土）京都から石見銀山まで移動。

11月7日（日）
場所：大森町・他郷阿部家

10時～12時：街並み視察
12時半～14時半：他郷阿部家にて松場大吉氏・登美氏のプレゼンテーション「石見銀山生活文化研究所の歩みを学ぶ」

14時半～15時半：石見銀山訪問

16時～18時半：Workshop1「『資源の呪い』を自然の恵みに変容させる」
趣旨説明　（アズビー・ブラウン）
自己紹介　（プロジェクトメンバー、出席者全員）
石見銀山の郷土史の説明　（地元の郷土史家）
講演　「アフリカにおける『資源の呪い』～自然の恵みへの変容のために」
（米川正子　宇都宮大学特任准教授/国連高等難民弁務官事務所UNHCR元ゴマ・コンゴ民主共和国所長）
質疑応答

19時～：交流＆学生による余興

11月8日（月）
午前～午後：石見銀山・街並み視察
16時～18時：Workshop2「『資源の呪い』を自然の恵みに変容させる」
前日の内容を踏まえ、石見銀山の事例をもとに、自然の恵みに変容させるにはについて車座になって話し合った。かつての暴力的な歴史の書き換え（「無害化」）の問題が指摘され、暴力経験を否定するのではなく、平和のために、どのようにして積極的に役立てていくのかについての重要な議論がなされた。

広島　11月9日（火）
変容の象徴的スペースに立ち会う～暴力から平和への道
Encountering a Symbolic Space of Transformation: from Violence to Peace

石見銀山から広島へ、原爆ドーム、宮島と「世界遺産の道」を辿る。ここでは広島平和文化センターの国本善平氏（被爆者・世界平和センター常任理事）と待ち合わせ、広島平和文化センタの菊楽忍（きくらく・しのぶ）氏より原爆ドームに関する説明を聴いた後、宮島を訪問した。そして原爆資料館見学後には、被爆者・山崎寛次氏のレクチャーが有り、「人間の欲（特に飢え）と戦争」についての話し合いがもたれた。その時代を生き、大きな被害を受けながら、その経験を伝え続ける山崎氏の生の声を聞く事が出来、一同感銘を受けた。夜の交流会では、都市プランナーで広島戦後復興の研究者・山下和也氏による「原爆建物」のスライド・レクチャー、またジョゼ・フォルジャズ氏とムビータ・ムビータ氏からもスライドの発表がなされた。広島平和文化センター理事長スティーブ・リーパー氏、エリザベス・ボールドウィン氏も交えて、日本内外における平和運動の今後について活発なやり取りを行った。

11月9日（火）
場所：原爆ドーム・宮島・平和文化センター

7時：石見銀山出発。

10時：広島市到着

10時半～：原爆ドームから船で宮島へ。（世界遺産から世界遺産への道）

14時半：広島に戻り、平和文化センターへ。

16時半：平和文化センター訪問

17時～：被爆体験者（山崎寛治氏）のお話を聞く

18時半～：交流ワークショップ

篠山　11月10日（水）～12日（金）
平和の空間を創造する～未来に向けたデザイン
Building a Path to the Future: from Violence to Peace

財政再建市に陥った篠山（兵庫県）だが、地元の豊富な「地域資源」の掘り起こしを成功させ、古くて新しい魅力を全国に発信している。今回、篠山市副市長であり、一般社団法人ノオトの理事長でもある金野幸雄氏の協力のもと、市内の新しい試みの紹介を受けた。まず、30年近く放置されていた築200年を越える農家「農文塾」を訪問した後、本年廃校となった小学校も視察。宿舎となった集落丸山（集落内の3棟の古民家を再生し平成21年10月に宿泊施設を開業。NPO法人集落丸山と一般社団法人ノオトが有限責任事業組合を設立、限界集落のリノベーションに挑戦）では、日本とアフリカのお茶文化を紹介し合うという趣旨のもと、住民の一人である松田慎之介氏を主人とし、戦国時代のお茶会野立てで濃い茶を頂いた。また、ムビータ氏によるアフリカのお茶・現地で飲まれているソルガム・ビール（雑穀ビール）のセレモニーを通じて、住民との野外での交流が行われた。その後、集落内の古民家に場を移し開催されたワークショップでは、スライドを使ったプロジェクト紹介と、ジョゼ・フォルジャズ氏とムビータ・ムビータ氏の作品の紹介があり、平和空間の創造に焦点を当てた討議が行われた。

11月10日に広島から移動し篠山（兵庫県）到着。

11月11日（木）
場所：集落丸山・一部野外

午前：農文塾視察、ほか

14時半～18時　実践ワークショップ
14時半～15時：ティーセレモニー（野外）
　◆日本のお茶会（松田慎之介氏、集落丸山在住）
　◆アフリカのお茶会（ムビータ・ムビータ）

15時～17時：（集落丸山・古民家にて）
　◆プロジェクトの概要と紹介
　◆プロジェクトの概要説明＆参加者自己紹介（舩田クラーセンさやか）
　◆東京→京都→石見銀山→広島をふり返る（アズビー・ブラウン）

17時～18時：スピーチ＆質疑応答　（集落丸山・古民家にて）
　◆東京→京都→石見銀山→広島→篠山を視察して
　（ジョゼ・フォルジャズ＆ムビータ・ムビータ）

18時～20時　交流ワークショップ
　◆座談会「平和の空間」作りに向けたヒント（参加者全員）

20時～21時：懇親会

11月12日（金）
9時～：篠山城下町・見学

横浜　11月13日（土）
ワークショップ：
未来のために「平和の空間」をデザインする～「暴力の空間」の脱構築化
Designing "Spaces of Peace" for the Future: Deconstruction of "Spaces of Violence"

「平和空間」を創造・計画するワークショップ。参加者には「異なる価値観を持つ者の共生」や「限られた農地や燃料などの資源供給、領域侵略」などと、紛争を想定した４シナリオが与えられ、４グループに別れて協議しながら粘土や紙や棒や段ボール等を使い、紛争解決の方法を見いだす課題が出された。グループ・ワークの後は講評会が有り、発表された作品はシンポジウムでも展示された。日本初のアフリカ・コンゴ民主共和国のルバ民族の「ルカサ」にインスピレーションを得た、この参加型ワークショップにおいては、28名の参加者全員が能力やセンスを十分に発揮し、非常に創造的なモデル制作がなされた。

11月13日（土）14時～17時
場所：横浜BankART1929 Mini Gallery

プログラム

1．プロジェクト概要（アズビー・ブラウン）
2．ルカサの背景～アフリカの歴史伝承の一つとして（竹下都）
3．世界の暴力紛争の種類（米川正子）

（グループワーク・Lukasa）

4．紛争シナリオを体現する
5．紛争シナリオを平和化する

（プレゼンテーション）

6．各グループによる発表
7．まとめ（舩田クラーセンさやか）

"Lukasa"

横浜　11月14日（日）
成果シンポジウム：
未来のために「平和の空間」をデザインする～「暴力の空間」の脱構築化
Designing “Spaces of Peace” for the Future: Deconstruction of “Spaces of Violence”

プロジェクトのフィナーレを飾るシンポジウムは、前日同様に、2008年に第4回アフリカ開発会議（TICAD IV）が開かれた横浜の地で迎えた。世界・アフリカ・日本にまたがる招聘者やプロジェクトメンバー、そして各地の参加者との出会い・発見・議論・制作が、生み出す新しい形の「平和の空間」の可能性とその困難について、招聘者による成果発表とパネルディスカッション、そしてグループに分かれての参加者全体との討論から明らかにしていった。このシンポジウムでは、二週間の成果を踏まえた新しい「平和の空間」のスタイルを提案し、通常の「国際会議」「シンポジウム」とは異なる空間となった。アフリカン・ドラムあり、アフリカン・ティーあり、「井戸端会議」ありの、自由な討論の場を創出したシンポジウムは、今後の更なる展開に繋げてゆくべき大きな可能性を確信して終了した。

11月14日（日）14時～17時
場所：横浜BankART1929 Mini Gallery

14時：オープニング・アフリカン・ドラム：Batuzolako Madimu Hector

14時5分～14時20分：プロジェクトの紹介＆ふり返り
　アズビー・ブラウン　（建築家/金沢工業大学未来デザイン研究所所長）

14時20分～15時：海外招聘者によるスピーチ＆作品紹介
　ジョゼ・フォルジャズ　（建築家/モザンビーク共和国元文化大臣/
　　エドアルド・モンドラーネ国立大学建築学科前学科長）
　ムビータ・ムビータ　（家職人/ザンビア共和国ロジ王国指定）

15時～15時20分：African Tea & Drums & 前日ワークショップの作品紹介

15時20分～16時：井戸端分科会 (プロジェクトメンバーを囲んでの分科会)

16時～16時45分：全体での討論「未来のための『平和の空間』創造に向けて」

16時45分～17時：クロージング・アフリカン・ドラム：Batuzolako Madimu Hector

4-２. 評価

本プロジェクトは、当初の計画に添ってスムーズに実施され、掲げた目的を全うする事が出来た。その理由として次の６項目があげられる。

1. アフリカと日本の知的交流が訪問した各地に於いて豊かに為された。
2. それにより、一般社会に広くアフリカ理解が広がった。
3. 西日本での視察やワークショップを通じて、「暴力の空間」と「平和の空間」に付いての討論により新しい理論展開が行われた。
4. アフリカの紛争、また日本や世界に於ける暴力について理解を進める事が出来た。
5. 「暴力を平和に変える空間」の具体的なイメージを生み出し、参加者と共有した。
6. 従来の国際交流や会議を超えた、新しい会議様式と創造的な新ツールを開発・実施。大きな成功を収めた。

この成果は、アフリカ専門家のみに偏らず、各地での多方面の知的リーダーとの交流・研究会を実施した事で、より広く各界に影響を与え裾野を広がらせる事が出来た。また、今後のプロジェクトの継続を計り、専用ブログの更新や出版計画を押し進める。

今後の発展と展望として、次の5項目をあげる。

1.「アフリカ x 日本 x 世界 II ～暴力を平和に変える空間」
本年度に得た成果を、継続し発展させて行くため、23年度には本事業のパート２としてアフリカに「場」を移し、２カ国でワークショップを実施する。研究調査には“LUKASA”の起源を訪ねる。今後はそのツール開発を行い、成果を効果的に社会に還元する。現在実施のため、国際交流基金にプロジェクト助成の申請中である。

2. “LUKASA”ワークショップ
11月13日に開催した“LUKASA”ワークショップは、我々の期待以上の成果を上げ、この問題解決の際に、議論のみに頼らず創作作業をしながら進める全員参加型のワークショップの今後の可能性を探る。既に国連大学に於ける米川正子氏の講義で実践を行い、東京外国語大学・宇都宮大学・JICAでも実施されている。

3. ザンビア・コンピューター・プロジェクト
ザンビアからの招聘者・ムビータ氏との出会い、交流を通じて、日本で使われていないコンピューターを送る計画の実現可能性を現在模索中である。コンピューターとCADソフトを、建築関係者や学生などに送り、小さなCAD教室設立を計画中である。現在、ザンビアに拠点を置くNPOに話をつないでいる。

4. ザンビア・畳・プロジェクト
ムビータ氏は、畳に興味を持ち、石見銀山で畳工場視察の際、自国の床マットとの基本的な織物技術の類似点に注目。今後の技術交流を模索する可能性を探る事となった。

5. 篠山・茶室計画
今回篠山訪問の際、集落丸山在住の松田慎之介氏による野点のお茶会を開催した。これに触発され、モザンビークの建築家ジョゼ・フォルジャズ氏が、この地に茶室設計を提案。すでに話し合いが進んでいる。実現すると日本で初となる、アフリカの建築家による茶室となる。

5. 広報活動

新聞：

毎日新聞　2010年11月5日（金）
「町家は平和の空間」

毎日新聞　2010年11月8日（月）
「伝統と現代 街並み称賛」

朝日新聞　2010年11月14日（日）
「紛争解決策 学生ら探る」

blog:

本プロジェクト・ブログ:
http://spacepeace.exblog.jp/11996330/

金沢工業大学
未来デザイン研究所・ブログ:
http://wwwr.kanazawa-it.ac.jp/fdi/FDI/Africa_x_Japan_x_World.html

BankART ブログ:
http://bankart1929.seesaa.net/archives/201011-1.html

ポスター：

表

裏

チラシを兼ねるポスター1,500部作成。アフリカ関係・美術・建築デザイン関係・大学などに配布した。

広報誌：

金沢工業大学・広報誌「旦月会」　2010年11月号

「アズビー・ブラウン准教授の提案課題に国際交流基金が助成」

金沢工業大学・広報誌「旦月会」2011年1月号

「未来デザイン研究所: 国内6カ所で14日間にわたり 研究会やワークショップを開催」

6.収支報告

（2011年2月22日現在）

国際航空運賃.....¥559,571

国内交通費.....¥220,460

宿泊費..... ¥981,490

資料・報告書作成費.....¥ 68,254

謝金.....¥471,650

その他（車両借料・郵送費）.....¥192,254

総合計.....¥2,493,679

国際交流基金・知的交流会議助成プログラムの助成を頂いた。
また、株式会社庵、株式会社石見銀山生活文化研究所、株式会社他郷阿部家、徳正寺、一般社団法人ノオト、BankART 1929、東京外国語大学大学院コミュニケーション・通訳専修コースのご支援も受けた

２０１１年２月

アズビーブラウン
所長
金沢工業大学 未来デザイン研究所

東京都渋谷区神宮前1-15-13 〒150-0001

Tel: 03-5410-8379
Fax: 03-5410-3057

brown@neptune.kanazawa-it.ac.jp

Prepared February 2011

Azby Brown
Director
KIT Future Design Institute

1-15-13 Jingumae, Shibuya-ku,
Tokyo 150-0001, Japan
tel: *81-3-5410-8379
Fax: *81-3-5410-3057

brown@neptune.kanazawa-it.ac.jp